



平成 26 年度 JICA アフリカ地域市場志向型農業振興（行政官）研修  
- JICA Market Oriented Agriculture Promotion for Executive Officer in Africa -

研修期間：【第一回】平成 26 年 5 月 12 日～ 5 月 23 日（2 週間）

【第二回】平成 26 年 11 月 17 日～ 11 月 28 日（2 週間）

研修場所：神戸市

研修内容：日本の農作物流通システム及び農業普及システムに関する講義／視察

ケニアで実施された「小規模園芸農民組織能力強化計画プロジェクト<sup>\*1</sup>」導入に向けた政策・活動計画立案のための演習

参加研修員：【第一回】19 名〔うち、1 名は JICA ナショナルスタッフ（ルワンダ）〕

（ケニア 2、ルワンダ 2、南アフリカ 3、ナミビア 2、レソト 2、ジンバブエ 2、ウガンダ 2、エチオピア 2、マダガスカル 2）

【第二回】17 名

（ケニア 2、ガーナ 2、ザンビア 1、スーダン 2、タンザニア 2、カメルーン 2、モザンビーク 1、マラウイ 2、セネガル 2、エジプト 1）



JA 兵庫六甲神戸西宮農総合センターの集出荷場にて、集荷されたキャベツが、規格ごとに綺麗に箱詰めされていました。

当財団では、独立行政法人国際協力機構(JICA)の委託を受け、「市場志向型農業振興（行政官）」研修を実施しました。この研修では、神戸市産業振興局そして JA 兵庫六甲の全面協力により、日本の農業に特徴的な営農普及制度そして農作物の流通システムを学びました。

研修初年度となる今年、アフリカ地域の 18 カ国から合計 36 名の研修員が神戸市の農業を学ぶために来日しました。アフリカと一言で表してみても、各国の農業を取り巻く環境は大きく異なります。しかし、多くの国が農業を国の重要な基幹産業と捉え、振興政策を模索しているのです。

そんな中、「売れる作物」の栽培や農家の組織力向上をめざし、市場志向の農業を推進したプロジェクトが、ケニアで実施されました。そして、同プロジェクトの対象地域では、ケニアの小規模農家の生活向上・収益アップという大きな成果をもたらしました。

<sup>\*1</sup> 小規模園芸農民組織能力強化計画プロジェクト（英名：Smallholder Horticulture Empowerment Project 通称 SHEP）：ケニアにおいて 2006 年から 2009 年にかけて実施され、「作ってから売る」から「売のために作る」という発想に転換し、市場を意識した農業を提案。農民組織自身による市場調査等の活動を支援し、対象農家の園芸による平均所得を大幅に向上させることに成功した。

第5回アフリカ開発会議（TICAD V）<sup>\*2</sup>でも大きく取り上げられたこの取組みは、現在、他のアフリカ諸国にも展開されつつあります。そこで、同プロジェクトで実施された手法の真髓を理解し、重要な要素を有効に取り入れるため、日本での研修が実施されました。研修員は、主に神戸市西区にて、農業関連機関の視察や農家のみなさんとの意見交換会などを行い、日本で行われている農業の取組みを学びました。



### ～研修を振り返って～

約154万人の人口を抱える大都市の神戸ですが、西区・北区に広大な農地を持ち、稲作や野菜・果物等の栽培が行われています。このように大消費地の近くに生産地が存在する都市近郊型農業が神戸市の農業の特徴であり、これにより、私たち消費者は、地元で採れた新鮮な作物を手に入れる事ができます。

研修員は、多くが日本で言う農林水産省などの国・地方の行政官で、母国の農業を成長させるべく、来日しました。2週間という短い期間の中、農作物の栽培から出荷、販売に至るまでに、日本の農家や農業関係機関、企業が行っている様々な工夫や農業経営を成り立たせるための努力を学びました。

さて、農家が大切に育てた農作物は、どのような経路をたどって、私たちの食卓まで届けられているのでしょうか。

農作物、特に野菜などの流通は、主に3つの経路があります。

第一に、農業協同組合（JA）を経由した流通です。栽培された作物は、まず地域のJAに集められ、そこで、複数の農家が栽培した野菜が共同で市場などに出荷されます。このように、JAが集荷・出荷の機能を担うことによって、均一な規格の野菜を、安定的に出荷することができます。

第二、第三としては、食品会社や量販店などの企業と栽培農家が、出荷量や商品の品質、栽培方法などについて一定の基準を定めた契約を結ぶ契約栽培や、農家が直接、消費者に商品を販売する直売といった2つの流通経路が挙げられます。これらの流通のかたちは、特に近年、「食の安全」に対する関心が高まる中で、「生産者の顔が見える商品」の展開を可能にするなどして、高い注目を集めています。

こうした複数の流通経路があることで、農家にとっては販売先の幅が広がり、消費者にとっては価格や品質などを比較でき、購入する商品の選択肢が増えることとなります。



神戸市中央卸売市場で早朝から行われている「せり」の見学。次々と瞬時に商品が入れ替わり競り落とされていきます。

<sup>\*2</sup> アフリカ開発会議（英名：Tokyo International Conference for African Development 通称 TICAD）：アフリカの開発をテーマとし、日本政府の主導のもと、国連・国連開発計画（UNDP）・アフリカ連合委員会（AUC）及び世界銀行と共同で開催される世界会議。2013年のTICAD Vでは、「横浜宣言 2013 躍動のアフリカと手を携えて」が採択され、農業の振興が重点分野として取り上げられた。

また、皆さんは、野菜などを購入する際、こういった点を重視されるでしょうか。

野菜は天候などの影響による生産量の変化に伴って価格が変動したり、近年の環境問題や食の安全に対する関心の高まりによって、「地産地消」で地元産の作物や、有機栽培などの農薬や化学肥料の使用を抑えた品種が注目されたりするため、消費者が商品を選ぶ際の指標は、価格や品種、産地など多岐にわたります。

そんな中、農作物が適正な価格で、安定的に供給されるよう、農家や販売店などの企業とともに、農業協同組合などの農業関係機関や行政が連携して、全体の出荷量や取引価格、消費者ニーズなどに関する情報交換や、新たな栽培技術・品種改良などの農業技術指導が行われています。

今回の研修は、アフリカ地域のみを対象にしたものですが、一言でアフリカと言っても、各国の農作物流通や農業普及の形は様々です。しかし、例えば、栽培した作物がバイヤーなどに安く買い叩かれ十分な収入を得られていないことや、農業普及員と農家との関係が上手く構築できていないことなど、各国で類似する課題もあります。



西区伊川谷町のほ場では、農家さんの栽培記録など、日常的な経営努力と、周辺農家さんとの協力体制について、教えていただきました。

こうした課題に対し、農業協同組合が提供しているサービスや、農業関連機関と農家組織間の活発な情報共有、そして、農家自身が自主的・日常的に行っている経営努力など、日本の農業振興の在り方を学べた事は、研修員にとって大きな収穫となったようです。後半に実施した演習では、こうした農業振興策の意義や効果を理解し、研修員それぞれが自国での取組みに活かせる要素を検証しました。

研修員の多くは、今回、初めて日本を訪れました。神戸市内での滞在は、洗練された都会の街並みと、緑豊かなほ場の風景の双方に触れることができ、研修員にとっては大都会のイメージが強い日本の色々

な面を見られる貴重な機会となりました。

また、研修員も質疑応答や意見交換の場では活発に発言し、講師である農家の方々と言語を越えたコミュニケーションで親交を深めるなど、積極的に研修に参加していました。日本の農業に係る具体的な取り組みはもちろん、一つ一つの活動に込められた意義を理解することができ、彼らの表情から、充実感と帰国後の活動に対する意欲の高まりを感じました。日本の農業から学んだ農家が「稼げる」仕組みが、研修員それぞれの国でも根付いていく事を期待しています。

研修担当：曾輪 沙耶加

委託元機関：独立行政法人国際協力機構（JICA）関西国際センター

協力機関：神戸市 産業振興局 農政部 農水産課／神戸大学／兵庫県 神戸県民センター 神戸農林振興事務所 神戸農業改良普及センター／神戸市中央卸売市場本場／神果神戸青果株式会社／JA 兵庫六甲神戸地域事業本部／JA 兵庫六甲神戸西営農総合センター／JA 兵庫六甲岩岡支店／イオンリテール株式会社／生活協同組合コープこうべ／有限会社アイ・エム・ジー／歴史街道推進協議会